



評者 富塚正輝
エッセイスト、山形市



坪内隆彦著 「木村武雄の日中国交正常化 王道アジア主義者・石原莞爾の魂」

真の日本近代史の見方示す

木村武雄(米沢市出身)といえは、「元帥」という愛称で知られ、戦後田中角栄内閣では建設大臣として、また日中国交正常化の愚子として活躍した政治家である。昭和史の裏側が主な活躍の場だったせいか、まだ正当な評価が得られていない。本書はその木村の生涯を追ったものである。

満州・支那(現中国)の対等な連携を謳う「東亜連盟」立ち上げに尽力した。これで西洋のアジア侵略に対抗しようとしたのだ。これを著者は王道アジア主義とし、西欧列強とともにアジア大陸での眼前の利益や果実をむさぼり食らうことに精いっぱい、日本をアジアの盟主と思

い上がった東条英機や武藤章らの逆鱗に触れ、田中はロッキード事件で葬り去られた。実は明治維新以降、王道アジア主義的な思想こそ日本近代の精神史の象徴であり、主流であった。しかし覇道アジア主義者らにより換骨奪胎され、大きな誤解を生んだ。現代の戦後教育の現場では、これらの事象はこ

とごく隠蔽されてしまっているのだ。残念なのは、本書での木村の行動の言及の中で、蓋然性が高いとはいえず、想像や推測が多いこと。もっとも歴史の裏の裏を語るときにはつきものなのだが、ともあれ、現在の日中関係の現状を木村は天国からどう見ているだろう。

(望楠書房・2000円)

統制派陸軍軍人らと、それらに阿諛追従していた思想家やマスコミ人のことを覇道アジア主義として峻別する。しかし、それらは終戦とともに連合軍によって一緒に解体させられた。そうした中でも、木村は王道アジア主義思想を受け継ぎ、日中国交正常化を成し遂げた。しかし、日中接近を嫌うアメリカ

るので、日本近代史の本当の姿が見えてこない。本書は木村を通して、真の日本近代史の見方を提示する。また面白いことに、王道アジア主義の系譜として「置賜アジア主義」という言葉が存在するという。その源流は、幕末維新时期に活躍した宮島誠一郎(米沢藩士)に発し、その息子・宮島詠士(大八)へと連なり、石原莞爾を経て、その末端に木村武